

Phil Klay, *Redeployment*におけるグローバル戦争としてのイラク戦争 戦地からアメリカ国内へと繋がる責任の再配備

足立伊織

1. 複数の一人称の語りによる短編集——他人の体験から構成されるイラク戦争

*Redeployment*は、海軍からの退役軍人である Phil Klay が 2014 年に 31 歳で発表した彼の第一短編集である。Klay はダートマス大学において文学を学んだ後、2005 年に海兵隊へ入隊、2007 年から 2008 年にかけてイラクの激戦区の一つであるアンバール県へ赴任した。2009 年に軍を離れてハンター大学の創作コースに入り、2011 年に MFA を取得した。

この短編集においては、12 の短編すべてが、まったく異なった人物像の語り手を持つ、一人称によって語られたものとなっている。ここで、まずは Michiko Kakutani が書評 “The Madness of War Told in the First Person” において称賛したように、この複数の語り手を用い、風刺的に、またリアルに、またより思索的に、と様々なモードによって描き出す手腕は評価されるべきだろう。しかし、まったく異なった人物像を持つ語り手がそれぞれ一人称で語る個々の物語を読んでいく読者は、その一人称による語り が虚構であり、仮にそこで語り手が体験したと語っている情報がすべて誰かによって現実に体験されていたとしても、少なくともその誰かがこの短編集を描いた作家 Phil Klay ではない、ということを経験的に理解せざるを得ない。Klay 自身、インタビュー¹において “I don’t think you can read the whole book and think it’s autobiographical” と簡潔に述べている。

しかし、ことアメリカの戦争文学において、一人称で語られる物語が、作家自身の体験ではないということが作品を読む体験の中で明白に示されるということは、我々読者にいくぶん衝撃を与える。なぜ衝撃を受けるのかと考えるならば、20 世紀の戦争小説、たとえば Kurt Vonnegut が第二次世界大戦を語った *Slaughterhouse-Five* (1969)、またたとえば Tim O’Brien が作者と同名の一人称の語り手によってベトナム戦争を語った *The Things They Carried* (1990) との比較が有益だろう²。それらの小説においては、おおむね作者の実体験に基づいた体験が、一貫した視点から語られながらも、SF 的な荒唐無稽な設定が加えられたり、語りの真実性を自ら引き下げたりするような語りの構造が見られた。このような語りの技法は、作者がどうしようもなく体験してしまったことを語ろうとしたときに、しかしその真実の戦争体験は外部から整理して語れるものではなく、また同時に自分の理性に落ち着けることができる真っ直ぐな語りとし

でも語れないということを引き受けたうえで、真実の体験に基づいているからこそその屈折した語りであったと言えるだろう。一方のKlayは、上岡伸雄からのインタビューに答えて、「アメリカの戦争文学の系譜には、戦争が基本的に表現不可能であると考えられる長い伝統があります」と述べ、O'Brienをこの系譜の中に位置づけ、自らをこのグループから除外する（上岡 185）。つまり、Vonnegutにおいては実体験を語るためにSF的な荒唐無稽さが要請され、O'Brienは、表現不可能な戦争の真実性を表現しようとしたことによって、一人称による屈折した語りを取らざるを得なかった。一方で、この短編集におけるKlayの語りは、まず事実のレベルにおいて作者の実体験を語っているわけではないということが明らかである。さらに、メタフィクショナルな仕掛けもなければ、作者が戦争を語ることに抱く自意識が薄く、一見あまりに屈託がないように思われるのだ。

ここで複数のインタビューで述べられている事実を記しておく、Klayはイラク戦争に広報担当官として参加し、戦闘の激しいアンバール県に配属され、転々と移動して兵士の話を聞き、悲惨な戦闘行為の事後現場や負傷者たちを目撃している。しかし、必ずしもKlay本人が兵士として戦闘行為に加わったわけではない。また戦争において様々な業務を行い、またアメリカに戻ってきて様々な生活を送っているように設定されている各語り手の中に、現実のKlayと設定を同じくする語り手は登場しない。そしてこの短編集に収められている兵士たちの体験には、Klayの実際に体験した出来事が反映されてもいるのだが、それはKlayがイラクで職業上聞くことになった様々な兵士たちの経験談、そして虚構と混ぜ合わされており、読者にとってはそこだけが浮いたものだと感じられない。たとえば、Klayは“After War, a Failure of the Imagination”というエッセイを、彼の戦争体験よりも過酷な体験であるかもしれない児童虐待を受けていたことを語る女友達が、“I’m sorry. I don’t mean to compare my experience to yours. I could never imagine what you’ve been through”と口にしたということから始めている。のちに見てゆくように、この挿話は戦場のトラウマ体験が理解不可能なものとして特権化されてしまう、というこの短編集が幾度か問題化する主題と関わる印象深いエピソードであり、短編“Unless It’s a Sucking Chest Wound”の中ではKlayと同様に戦場でデスクワークを行っていた語り手の恋人が“*And I’m not comparing what I’ve been through to what you have*”; “*Mine is just, whatever, and I’m sure you’ve gone through stuff. . .*”; “*Well. I’m not saying mine’s as bad*” (260)と口にすることになる。とはいえ、この短編の語り手は、退役後に弁護士となり、国選弁護士として公共のために働いたり、またかつての軍隊仲間たちに罪悪感を抱えながら企業弁護士として大金を稼いだりしている点で、Klayとははっきり異なる人物であり、恋人とのエピソードも印象的な挿話にとどまる。ここには、自分自身の体験と虚構を、どちらをも特別視せず継ぎ目なく混ぜ合わせるKlayの手腕が見て取れるだろう。

その一方で、いくつかの短編においては、作品世界内において、語り手が戦争の体験を日常生活に帰ってきて戦争を体験していない相手に語ることに関する困難を感じてい

る姿が描かれる。またたとえば“OIF”においては、軍隊における略語が大量に使われて、ほとんどの読者には意味がわからないものになっていることにより、パフォーマンス型に、戦争を体験していないものには理解できない物語というものが提出されている、と言えるだろう。さらには、イラクの戦地を舞台とする短編においても、体験したものとを従軍している者同士で語ることで自身が作品の主題として前景化している箇所が見受けられる。ここにおいてはイラクに行っている者同士でも、さらには同じ戦闘に参加した者同士でも、共感や理解などといったものが困難であるということが意識されることになる。

つまり、戦争体験を語ることの不可能性といった問題がKlayにもはっきりと意識されていることは、作品を読んでいく上でまた明らかなのだ。そしてさらには、その体験を自分のものとして引き受けることのできる聴き手（＝読者）といったものの存在も疑われている。したがって、この短編集においてそれぞれ一人称で語られる複数の物語は、まず事実のレベルにおいて作者が自分の経験としてはっきりと体験したものでなく、自分以外の兵士が体験した体験を、屈託なく引き受けて、あたかも自分の体験であるかのように語られているものでもない。共通するキャラクターも持たないそれぞれ独立した短編群が、しかし短編集として読むことで明らかであるこの問題を、本稿はまずこの短編集に内在する作品の特徴だとみなす。すなわち、*Redeployment*とはイラク戦争を語るというコンセプトによって統一された連作短編集であり、そこではここで問題化した、体験、語るという行為が主題化されている。本稿はこの語り内に内在するジェンダーの問題を経由し、やがて、脱政治化されたかのように見える物語群が、総体としてイラク戦争を描き出し、政治と責任の問題に回帰する姿を見て取ってゆくことになる。

2. 古いシステムの崩壊と意味ある体験の不可能性

一体なぜ、このような、複数の視点から戦争を語るといった構成がとられているのだろうか。第一に、それぞれの語り手が多種多様な軍事業務を行っているように、現在アメリカ軍が行っている軍事行動においては、旧来の戦争のように敵と直接対決するといったような単純な戦闘形態はまったく中心的なものではないからということが挙げうる。冷戦後のグローバル戦争におけるRMA (Revolution in Military Affairs) と呼ばれる軍事革命は、あらたな通信・情報技術に基づき、米軍の圧倒的な軍事的優位を前提とし、冷戦構造までは残っていた予測可能な大規模戦争という戦争のパラダイムを放棄する。その代わりに現れるものは、高度なネットワークによってコントロールされた無数の小規模部隊が、それぞれ柔軟に、突発的なテロリズムや小中規模の戦争、搜索活動から人道支援による治安維持といった様々な形の軍事行為を行うという戦争の形態である (Hardt 41-42)。この軍事行為の多様化に伴い、戦闘行為に従事する単一の兵士を中心に上げて代表させることによって戦争の全体を表象するということは端的にもはや不可能となっている。

このように、戦争を統御するシステムが変化したことへの反応が見られる短編が、まさに語り手が現地の復興支援活動という新たな戦争の形の一部を業務としている“Money as a Weapons System”である。この短編は、語り手がKlayと同様にある種のオフィスワークを行っていることもあってか、上で触れた語りに関する問題があまり前景化しない。さらにこの短編は、かなり戦争に対する風刺的なトーンが強いこともあって、いささか他の短編と比べて単純なものになってしまっているように思われるが、上記した戦争の背後にあるシステムがこの短編によって見えやすいものになっているという点で評価しうる。

短編冒頭で語られるのは、“Success was a matter of perspective”という認識である。“There was no Omaha Beach, no Vicksburg Campaign, not even an Alamo to signal a clear defeat” (77) と、もはやテキサス独立戦争や南北戦争、第二次大戦には存在していたような、明白な勝敗を付けてくれるような戦闘行為はイラク戦争には存在しないのだ。ここにおいて明らかなのは、もはや戦争の認識（そしてその表象）を支える、華々しい英雄的な戦闘における勝利や敗北といったものから構成される、きわめて古くからある戦争の物語といったものは機能していないということである。イラク側、アメリカ側双方に多くの超法規的な軍事行動があるために、そもそもイラク戦争はいわゆる国家間のルールに基づいた戦争ではなく、戦闘もかつてのような戦闘行為ではなくなっている。イラク戦争においては、主権国家同士が政治的な名目によって軍事行為を行いあうというよりも、大量破壊兵器保持の疑いやテロリズムの可能性といったリスクを排除するための超国家的な警察的軍事行動が（少なくとも名目上の）目的となる。この時アメリカ合衆国は相手を法の外に位置づけて国家とは認めず、また自らを普遍的な法を体現し維持するための軍事行為を行うものとして位置づけるため、あらゆる波乱が法の外にある一種の「例外状態」として認識されるほかなくなってしまう。戦地で軍事行為に携わる個々の従軍者にとって、もはや戦争は法の下でそれぞれの背景にある相同的な中心を代表しあって戦いあうものではなく、多種多様の例外的な事件に振り回されるものとして映ることになる。

この時点で、イラク戦争というものを認識し、語るための二つの古い大きなシステムが崩壊していることが明白であるように思われる。この短編集を通して読んでゆくことによって、まずは各々の短編によって復興支援や直接的な戦闘行為、兵士の心理的ケアなどを仕事とする様々な語り手による分業形式によって戦争が成り立っていることがわかり、後述するが、個々の種類の業務に携わる従軍者であっても、高度にマニュアル化された方式によって分業的に仕事を行うようになってきていることがわかる。その結果として、イラク戦争を語る際に、ある代表的な個人の体験といったものに基づいても、あるいは既存の戦争物語に似たナラティブに基づいても、これが「イラク戦争」だといった全貌を語ることはできない。諏訪部浩一は、「戦争に——とりわけ大義なき戦争には——一枚岩的な経験などありはしないのである。それを実感させられた読者は、『一時帰還』が（単なる短編の寄せ集めではなく）一冊の書物として提出されていることの必然

性に気づくだろう」と述べ、戦争を包括的に描こうとしながらも、わかりやすい（単一の）物語を拒否し、多様な立場の語り手が登場することを評価する。もはや個人にはアクセスできない新たな大きなシステム、あるいは古い大きなシステムの崩壊、といったものを語るためには、複数の視点が要請されてしまうことがまずは以上のように理解される。

この短編においては、さらにより具体的なシステムが描かれる。語り手は“ePRT”（embedded Provincial Reconstruction Team）として赴任し、当地の再建を目指すのだが、そこにおいては現地の業務においても、また指示を出してくる上官や議員といった予算の送り主であるアメリカ側においても腐敗が起っており、その状況下で語り手はほとんど不条理で無意味な行動しかとることができない。さらに、イラク国民側においても、アメリカ側がシーア派とスンニ派をそれぞれ分けて省庁に配分したために根本的なシステムの機能不全が起っており、水道などのインフラ整備すらすることができない（89）³。議員の後援者である金持ちの愚かしい無邪気さによって、地域を再建するためにはアメリカの文化である野球を現地に広めなければならないという仕事が語り手には与えられ、現地の文化に直面する語り手の体験によってその愚かしさははっきりと風刺される。その一方で、イラクの文化といったものも一枚岩ではなく、シーア派やスンニ派といった宗派の差はそれぞれ語り手にとっても理解できない文化として現れる。上で触れたシーア派とスンニ派の対立に配慮しない行政管理によるインフラの機能不全だけではなく、たとえばシーア派の下では“*Nikah mut'ah*”（＝一時的な結婚）という実質的な売春が許されていると聞かされた語り手はこれを直截的に“*Prostitution*”と呼んでしまい、イスラム教では売春は許されない、と言われてしまう（91）。つまり、語り手の意識の上においても、馬鹿げたアメリカの文化に対し、はっきりと手元にあるイラクの文化、といった構図は引くことができない。混乱状況を整理し、意味づけるためのシステムはまったくの機能不全に陥り、語り手は無意味さに直面し続けることとなる。

その一方で、軍隊の行政システムが腐敗していようが、しかしすべてがどこか巨視的なレベルにおいては偉い人々の金と出世のために行われているというシステムは揺るがない。この、現地の直接的な軍事行動と関係のない大きなシステムは、戦地のさまざまな苦しみと真面目に立ち向かおうとする人間にとっては当然アクセスできないものとなっている。タイトルに“*money*”と入っているこの短編においては、作品中でもしばしばさまざまに動く金の金額が口にされ、市場原理が強調されている。藤井光はこの短編に関して以下のように述べる。

イラクの土地は企業にとっての「旨味」によって査定され、利益を搾り取るべき対象となっていく。こうして、戦争による荒廃とはまた別種の「荒地」が待っているという未来像を、主人公は目撃してしまう。緑豊かな農業地帯が広がるその土地は、グローバル市場に組み込まれた荒地予備軍なのだ。彼がどれほど奮闘し

ようと、その努力はイラクの生活レベル向上とは違うところに吸い込まれてしまう運命にある。(235)

たとえば、政治家の後援者である富豪から、野球用具を送ったので、野球の精神を根付かせることによってイラクに民主主義を与えてくれ、というEメールを受け取った語り手は、当然ながらそれを“bullshit”だと思う。しかしそのEメールに対し、無理があるのではないかと語り手が返信すると、たちまち政治家や軍隊の高官たちの間で、とっとと富豪の言うとおりにしなぐれはならないというEメールが、大量の同報送信によって作られるネットワーク上を飛び交う。語り手はそれを目撃しながらも、なにもすることができない(99-103)。現地人の苦しみや、それに立ち向かおうとする語り手の個人的な努力などは、戦地から離れてどこかアクセスできないところで動いている巨大な金と政治のネットワークにとっては意味をなさないものなのだ。

その一方で、“how do you deal with it? The bullshit?”(112)と訊ねる語り手に対し、この腐敗にあまりに無邪気に、愚かに従っているように振る舞うZimaは、“There is no bullshit”と答える。Zimaによれば、2年前の狂気に対して、いまはいくらかましなのであり、したがって“*There’s a reason for everything*”ということになる。語り手はここで、“Zima’s mask had slipped and given me a glimpse of some *incomprehensible* sadness [...] This country had a *history* that didn’t reset when a new unit *rotated* in. This time, these problems, they were an improvement” (112 イタリクスは引用者による)といった認識へと至る。さらに、なぜ腐敗に満ちたアメリカ地域再建システムのために働いているのか、それは“Nonsense”(116)ではないかと語り手によって訊ねられた、アメリカに対して明確に批判的な現地の通訳は、“*Even without hope, you must try*”(117)と答える。そしてこの通訳が、現地の子供が野球をしているように見せかけた馬鹿げた写真がうまく撮れたことに対して“Success”(117)と述べてみせることで短編は終わる。ここでは、Zimaも、通訳も、rotateしてきたばかりの語り手にとっては“incomprehensible”な“history”を抱えているものとして現れている。つまり、上層部からの指令によってあちこちと配置換えを繰り返す個人にとっては、通時的な生きられた物語にもアクセスできないという、またあらたな無意味さが描かれている。そして、この短編は“*Success was a matter of perspective*”という一文において始まっているわけだが、当然、通訳はアメリカの愚鈍な富豪と“*perspective*”を共有しているわけではなく、ここには最大限のアイロニーが込められている。

しかし同時に見過ごせないのは、ここにおいて、ある「意味」といったものを保証してくれるシステムが機能不全に陥っているか、あるいは腐敗しているか、あるいはアクセス不能か、といった状況において、しかしひとはそこにおいて実際に存在している無意味さに、無意味でもなお向き合わねばならないのだ、といったビジョンが提出されているように思われることだ。何か大きなシステムにアクセスすることによって物事を意

味づけることは不可能であり、上で見た皮肉からは、個人がこの巨大な戦争の中でどんな“perspective”を持つことができるのだろうか、という諦観が感じられる。しかし、短編の語り手は、短編内の世界においては聞き手として、理解できない物語の重みと向き合い、それに対してある尊重の態度を払い、それに対して理解ではなく実際的な行動によって応えることで、状況をいくらかましなものにするほかない。つまり、問題は、物語を理解することではなく、また何らかの大きなシステムを参照する“perspective”によって物事を意味づけることでもなく、目の前にある苦しみに対して、即物的に、理解を欠いたまま行為で答えることこそが問題だ、というモードの転換が起きていると言えるだろう。

この短編集はイラク戦争を描くものでありながら、戦争体験を語ること自体が焦点化されており、作品内現在において直接の戦闘行為や爆弾の爆発が語り手によって体験されるものは、“Frago”と“OIF”の二編しかない。そしてその二編はともに、軍隊内において使用される略語が大量に使用されて書かれることで、軍隊の外部のものにとっては理解不能であるようなことが文面からパフォーマティブに示され、他の短編と比べてもタフで即物的な語り口が採用されている。“Frago”においては、敵兵士を撃ってしまった若い兵士が放心状態に陥ってアイスクリームが溶けてゆくのをじっと眺めているのに対し、語り手がただ“No good. I put a spoon in his hand. You’ve got to do the basic things” (27) と語ることで短編が終わる。極めて過酷で、生存がかかった体験が目の前で展開される時、そこにおいては理解を求めることなどまずは贅沢であり、その過酷さを共有する兵士同士は、まずただ食べ物を食べるといった、そしてショックに対してはただスプーンを握らせる、といった“basic things”によって、とにかく目の前のことを片付け、耐えねばならない。

ここにおいて、戦争の政治的な是非や意味、また文化的な問題が、おおむね語りから除外されてゆくことも理解されるように思われる。戦争は動かしようもなくすでにあり、それぞれの短編の12人の語り手が入隊した理由はほとんど語られない⁴。ベトナム戦争以降のアメリカの戦争はすべてが志願兵によるものとなっており、また志願兵は必ずしもイラク戦争のために入隊したわけでもないの、そもそも語り手それぞれの政治的立場を云々してもさほど実りが無いということもあるだろう。ともあれ短編集全体を貫いている語り口は、すでに存在する無意味な混乱に対してその是非を云々することよりも、それぞれの人間が配置され放り込まれた場所でそれぞれ実際的に向き合わなくてはならない個々の問題の存在を提示するほうへと向かう。政治の問題は個々の語り手の意識には浮上せず、作品から除外され(ときには現地にいないものの弄する戯言として扱われ)、向き合うべき実際的な問題が描写の中心となってゆく。そして同時に、読者はそれぞれの短編において、語り手の一人称を追体験し、それぞれの配置に放り込まれて、意味が与えられないまま個々の例外状態に向き合わなくてはならないというわけだ。

意味ある物語、歴史といったものは、すでに見たように、戦地の各地点を、また国内へと短期間で“rotate”し続けるそれぞれの軍人にはアクセスできないものという形も

取っている。つまり、数年の赴任ではそもそもイラクの歴史もアメリカの歴史も自分のものとして引き受けることはできず、さらに配置が転々と変わること、各地域での個別の問題、個別の物語を自分のものとして引き受けることはできない、といった問題がここで浮上している。そしてここにおいて、自分のものとしてある行動原理や判断ではなく、外部から与えられたマニュアルが自分の行為を決定する、という実際的な問題が生まれてくる。逆に言えば、上で見てきたようなネットワーク状の巨大なシステムと、それが事前のシミュレートに基づいて用意したマニュアルこそが、グローバル戦争に参加する個々の兵士に、一種の分業制に基づく可動性と柔軟性に富んだ多様な軍事活動を可能にさせていると言える。

そもそも1本目に配置されているタイトルストーリー、“Redeployment”において、この配置換えが主題として扱われている。ここにおいては、アメリカへの帰還が描かれているわけだが、一度戦争を体験したものにとって、アメリカへの帰還はもはや帰還ではなく、配置換えに過ぎない、というビジョンが“redeployment”というタイトルからも明らかだ。語り手は妻に連れられて買い物へ行くのだが、そこで戦地と同様の警戒状態を保つ。警戒状態においては、あらゆる情報に注意しなくてはならない。

It's hard to even remember exactly what that felt like. I think you take in too much information to store so you just forget, free up brain space to take in everything about the next moment that might keep you alive. And then you forget that moment, too, and focus on the next. And the next. And the next. For seven months. (13)

このような、極度の緊張によって物事を記憶することすらできない、あらゆる瞬間を自分のものとして体験することもできないような態度は、アメリカに帰ってきてても続いてしまう。このような状態もしかして、“But you go through like you were trained, and it works” (12) と語られる。自分のものとして体験できない、理解不能な物事に際し、兵士は外部化されたマニュアルのようなものに頼って、その瞬間すべきことを行ってゆく。

語り手は、病気で弱り果てた自分の飼い犬、Vicar を撃たなくてはならない、と考えながら、“something in me is going to break if I do this” (15) と感じ、それを戦地で液状の汚物に潜んでいたイラク兵を撃たなくてはならず、結局撃てなかったときの感覚と近いと述べる。イラク兵のその苦境に対して語り手は“I couldn't imagine it”と述べており、相手の側にもまた理解を超えた体験を見て取ってしまっている。最終的に、彼が犬を撃つ際の描写を見てゆくと、“I'd been trained to do it right”と、訓練された手順に基づき行為を行ってゆくことがわかる。“I focused on Vicar, then on the sights. Vicar disappeared into a gray blur”と述べられるにあたって、彼は飼い犬から照準へと意識を移し、いわば個別の、自分の犬を意識から締め出し、マニュアルに意

識を引き渡す。“There had to be three shots”; “The first two have to be fired quick, that’s important”; “Two bullets tore through his chest”; “That’s how it should be done” といった一連の描写 (15) においては、主語が語り手、“I” ではなく、さまざまな武器であり、マニュアルとなっている。つまり、ここで語り手は、トラウマ的な理解不可能な体験という意味において、またそれに際して自分の行動原理をマニュアルに引き渡すという意味において、自分のものとしては体験できないような体験を経験している。撃ち終えたあとも、“I stayed there staring at the sights for a while. Vicar was a blur of gray and black” と、彼は犬の死体を見ようとして正視することができず、道具にすぎない銃の照準こそが意識の中心にある。しかし、“I couldn’t remember what I was going to do with the body” (16) という最後の一文からは、意味ある体験としては体験できないものを、それでも個人として実際的に対処して経験しなければならなかった際に陥る苦境が伝わるように思われる。マニュアルに基づいて状況に対処しなくてはならない兵士と、自分の飼い犬の死体に向き合わなくてはならない個人との間で引き裂かれた語り手は、ただ立ち尽くすほかない。

ここにおいて、実際に戦闘に参加した兵士は、語るべき真実の体験を持っている。一方で、その真実の体験は、彼にとっても自分の外部にあるような体験としてしか現れない。さしあたりここにおいては、ある体験を本当に自分のものとして意識の中に位置づけることの不可能性という一点に関しては、作者の Klay も兵士も同等であると言えよう。そして、自分のものにはできないような種類の体験であっても、それでも自分ひとりで、とりあえず放り込まれた場所でそれに向かい合わなくてはならないということと、戦地にいない読者がそれぞれの短編において一人称の語り手に放り込まなければならないことも、さしあたり類比的であるように思われる。Klay のこのような戦争体験観によって、冒頭で問題にしたような、Klay 自身の体験ではない物語が一人称で語られてゆくという小説の構造の一部は、このような背景によって説明しうる。

論点を先取してここで触れておくと、この短編集においては男女問題が定期的に描かれる。もっとも直截的な形で男女問題を描くのは、男性兵士の買春が主題となっている短編 “In Vietnam They Had Whores” であり、男性兵士は “my friend, didn’t care which” (120) と、女性を物として扱うことにより、どんな女性でも関係ない、という交換可能性の中で相手にひどい暴力をふるい、ただ肉体的な接触を持つ。しかし、相手が誰でもいいのは、娼婦の側からしても同様であり、ここでは相互理解や感情の交流を欠いたまま、ただ買春・売春のマニュアルに沿って、物としての身体同士の接触が果たされるが、語り手はそれに強い虚しさを感じる。

冒頭に収められているこの短編 “Redeployment” においても、語り手が妻のもとへ帰ってくるという設定が与えられている。語り手は妻に戦争体験を話すことがなく、二人の関係はぎこちないまま、語り手が妻を家に置いて、一人で犬を射殺しに出かけていくということになっている。語り手は、自分の戦争体験が妻にとってもまた理解不可能なものであるという認識の上で、相互理解といったものを求めず、一人で問題に対処し、

途方に暮れる。ここでは、理解不可能なものへの実際的な対処、という行為が、タフで男性的な行為として描かれているように思われ、その破綻が予告されているということを確認しておこう。

3. 表象不可能な戦争体験とパフォーマティブな語りの行為

“After Action Report”においては、発砲してきたイラクの少年を撃ってしまったという体験を、文字通りに自分のものとしては引き受けることができない兵士 **Timhead** が登場する。**Timhead** が、自分が撃ったということを否定してしまうために、かわりに、語り手が銃撃をおこなった者だと、上官や周囲の兵士には見做されることになる。つまり、語り手は（少なくとも周囲の人間に対して）この体験をかわりに自分のものとして引き受けることとなる。**Timhead** は携帯ゲーム機に没頭することでその体験から逃れようとするが、同時に、語り手によって気持ちを訊ねられ、不器用に自分の体験を語ってみせもする。しかし、まず彼は自分のショックの原因を、撃った少年が自分の弟と同じくらいの歳だったからだとし、次に語るときにはその少年が問題ではなく、その少年を見ていた妹の女の子が自分の妹と同じ年だからとする。語り手はそれに対し “I definitely didn’t remember that. I thought maybe Timhead had imagined it” (48) と述べており、**Timhead** が自分の体験から受けたショックの正体が本当は何なのかはわからないにせよ、少なくとも **Timhead** の語りが彼の体験を語ろうとする際に混乱していることは明らかだろう。むしろその混乱から浮かび上がってくるのは、あるトラウマ的な体験を語ることの困難さである。

戦闘において撃ったり撃たれたりするという、当たり前になさなくてはいけない厳しい実際的な行為に関して、語り手と **Timhead** の周りの人間は、ヒロイズムを持ち出したり、機械的な軍隊ジョークを交えてタフで実際的に振る舞ったり、あるいは信仰の物語の中にそれを位置付けることで対処しようとする。彼らは自分の経験を超えた体験といったものになってしまうような辛い行為を、日々こなしてゆくために、それを何らかの語り口によっていわば欺瞞的に処理していると言える。**Timhead** の語りも、自分が撃ってしまった個別の個人に向き合うのではなく、彼の弟や妹といったものを引き合いに出してなんとか語ろうとするようなものではあるが、しかしその語りがうまく落ち着かないことからむしろ、彼が語ることでできない体験に正面から向き合ってしまったことが示されている。そして **Timhead** と語り手は周りの人々の語り口に、違和感や、はっきりとした反感を示す。

周りの人々が、なんらかの語り口に依拠することで、語れないような体験をコード化して語ることにより、日々の戦闘行為を実際に行おうとするといったものとは別のありようで、語り手はしかし **Timhead** の代わりに、**Timhead** の体験を自分の体験として周囲の人間に語ろうとする。カウンセリングに似た治療の語りといったものが模索されているわけだが、ここで語り手は **Timhead** の話を信じているわけでもなく、自分の体

験として引き受けることができているわけでもない。彼は、ただ機械的にTimheadの混乱した話を繰り返す。つまり、語り手はTimheadの語りの内容、語りの意味を正確に理解しようなどとはしていない。そしてまた、相談相手が語りをそれぞれ職業的なコード、男性的なコード、宗教的なコードに収めてくれるということに直接的な意味を見出しているわけでもない。

結末においては、首を撃たれて危うく命を落としかけた兵士が、周りの仲間に対して傷を見せながら、“Girls’ll ask and I’ll be like, ‘Whatever, I just got shot one time in Iraq, it’s cool’” (51) と語ってみせる。その兵士が本当にショックを受けていないのかどうかは判別がつかないが、ともあれこのようにして、女性を性的に搾取することに関するジョークを言い、タフでクールにふるまう態度を共有する男性的なコードの語りによって、軍隊内の空気はさしあたり安定しているのだ。この兵士の振る舞いを、Timheadは“Mr. Tough Guy”と揶揄し、“full of shit”と腐す。語り手は同様の苛立ちを抱えながらもそれに対し、“He got shot in the neck and he’s going out tomorrow, same as us. Let him say what he wants”と答え、Timheadもそれに“Whatever. It doesn’t matter” (52) と同意する。つまり、トラウマ的な体験というものがどうせ語るができないのであるならば、それを内容面においてどのように語ろうが、大した差はないのだ。したがってまずは、あるトラウマ的な体験を正確に語るという事実確認的な次元ではなく、その体験をコード化して共有し、また明日も戦闘に向かうためにごまかすために語るという行為遂行的な次元こそが問題なのだ。

したがって、ここにおいてもまた、真実の体験の理解といったものは成立していない。しかしそれでもなお、タフガイさを誇ってみせる周りの人間や、宗教的な癒しを与えてくれようとする周囲の人間に対し、語り手ははっきりとした対照をなして、あくまでもTimheadの語った通りのことを語りつづけるということを見過ごすわけにはいかない。語り手もTimheadの体験を共有できるわけではない以上、これもひとつの行為としての語りとして見るほかない。しかし、この行為は、日々の戦闘行為を続けるためのものではなく、Timheadが自分のものにはできないような体験に苦しむことを、相似的に引き受けるという行為なのだ。そして、そのような形で他人の体験を物語るということによってパフォーマンスな形でしか書くことのできないような苦しみというものを、この短編自体が伝えてくると言えるのではないか。

続く“Bodies”においては、死体処理業務を体験した男が、今度はアメリカの日常に住む人々に自分の体験を語る事が問題となる。つまり、この短編においては明日も続く実際の軍業務を抱えているわけではなく、少しでも似たような体験を持っているわけでもない、安全な場所にいる一種の部外者に語る事が問題となっているのだ。“For a long time I was angry” (53) とはじまるこの短編においても、語り手は苛立っており、その苛立ちはあれこれとイラク戦争について聞きたがるアメリカの人々に対して向けられる。彼は“*There are two ways to tell the story*”として、男性ならば可笑しい語り口、女性ならば悲しい語り口を求めており、いずれにせよそれに適した“lies”

を語るのだという。ここにおいて問題となるのが、戦争に行っていない人々の覗き趣味とでもいったものであり、彼らはそれぞれのやり方で戦争体験を知りたがり、同時に元から自分が求めていたある語り口にそれがすんなりと収まるのを聞いて満足する。ここでは語ることのできない真実といったものは温存されてしまう。つまり、聴き手たちは、兵士たちが体験した理解できない体験は、自分たちには決して理解できないのだと明白に線引きしたうえで、その体験を持っている兵士を敬い、同時にその戦争の語りが自分たちを安心させる構図に収まる範囲において兵士を迎え入れ、丁寧に扱う。語り手もそれを意識し、それを目的として戦争の話を語る。

Roy Scranton が論じるように、この兵士にしかわからないとされる表象不可能な真実の体験というものは、戦争から帰還した作家が戦争を物語るアメリカ文学の伝統において（本稿冒頭では O'Brien と Vonnegut のみを挙げたが、Ernest Hemingway やそれ以前の文学作品においても）、中心的な主題となってきた。そして、表象不可能な真実の体験＝トラウマを中心に据えることは、弊害として、語ることのできない体験と、それを実際に体験した兵士を神聖化し、否定神学的に祭り上げてしまい、戦争の背景にある政治的な議論を押し込めてしまう。特に、ベトナム戦争以後においては、すべての兵士が志願兵となっているため、それらの兵士は個々人としては半ば自己責任で出兵を選択したことになり、この祭り上げによる政治の排除は一層の問題となる。そして、Scranton は *Redeployment* に収められている短編においても、Klay は自分で体験したことですらないのに、同様の問題を抱え込んでしまっているとす。しかし、すでに見たように、この短編集においては、複数の語り手による一人称の短編による構成が採られているという時点で、明白に全てを自ら体験したわけではないことが明らかな作者である Klay は、真実のトラウマ体験の特権化に手を貸しているとは言えない。また、“After War, a Failure of the Imagination” や “Treat Veterans with Respect, Not Pity” といったエッセイにおいては、Klay 自身がはっきりと上記の文学伝統に背を向け、表象不可能なトラウマに対する憐みの反応が様々な議論や複雑さを消し去ってしまうことを指摘している。つまり、以上で作品内においても見てきたように、戦場の兵士が、本人にとって表象不可能だと思われる体験を抱え込み、周囲の人間もまたそれを理解不能なものとして扱ってしまうという否定神学的なプロセスは、この短編集に関しては、作品全体が読者に及ぼしてしまう効果における欠点などでは決してなく、前提としてある現実として作品内にしっかりと書き込まれて、問題化されようとしているのだ。

この問題は、派兵に伴って破局した恋人と、故郷の町で再会するというプロットを持つ “Bodies” においては特に強くジェンダー的な問題と関わって焦点化される。“she listened, and there’s a beauty in that you don’t often find” (55) と語られるような、「優れた聞き手」である恋人にとっても、語り手の入隊の動機は——語り手にとって理解不能であるのと同程度に——理解不能なものとして現れる。しかし、“I told her, ‘What’s done is done.’ It made me feel like a tough guy from a movie” (56) という記述などからはむしろ、何も語らず、ただ寡黙にタフな振る舞いをすることによって、

男性性が特権化されて温存されるという論理が見て取れる。

しかし、いざ戦地へ行くと、語り手は二種の不条理に直面する。第一が、過剰な男性性のレトリックにより守られるホモソーシャルな規律である。恋人から送ってもらった写真が見つかった語り手は、それを食べさせられながら、上官が “a true Marine wouldn't just share naked photos of his girlfriend with his platoon, but would let them run a train on her as well” (58) とまで言うのを聞く。ここにおいて女性は物のような扱いを受けていると言えよう。第二が、決してタフな男の経験などといった安易なナラティブなどには収まりきらない戦地の体験である。語り手がかつて加担した男性的でタフな語り口によって戦場が語られるのを聞いた語り手は、もはや “What I liked about the story was that even it had happened, more or less, it was still total bullshit. After our deployment there wasn't anybody, not even Corporal G, who talked about the remains that way” (54) と皮肉な目を向けるほかない。“I was going somewhere that would definitely make me a man” という男性的な物語への期待は砕かれ、語り手には “what happened in Iraq was just what happened” という同語反復的な言葉しか残されない (59)。

そして帰国後、セックスに成功するが虚しいナンパと、元恋人の家を訪ね、気まずい、ほとんど無内容な会話と身体の軽い接触のみが行われたことが描かれる。いずれの女性との関係においても、“I had this sense of looking at myself from above, like all of my wanting her was there in my body and I was outside of it, watching” (68) といった形で語り手は生き生きとした女性との関係を体験することに失敗していると言えるようにおもわれる。一方で、体を開こうとしない元恋人に対して “I was a veteran. Who was she?” (67) といった苛立ちに襲われながらも、「優れた聞き手」である彼女に彼が戦争の話をしなかったのは、それによって (ナンパに役立つ) ある種の同情や尊敬が得られてしまうことを避け、そして彼女に対して真実の体験を捻じ曲げずに何とか伝えたいと不器用にもがいているからではないか。彼は無言で彼女と体をただ接触させ、“I relaxed, too, all the sharp edges of my body lost in the feel of her” (67) と、この短編集全体を通しても珍しい、ある安息を感じている。“What's done is done” と “what happened in Iraq was just what happened” という二つの無意味な同語反復自体に変わりはない。しかし、真実の体験は表象を超えたところにあるのだ、としてその価値を温存する語らなさ (または、どうせ真実の体験は語れないのだから “lies” をつくこと) と、そのような価値づけに飽き果て、語れないながらも、なんとか体験を歪めずに提出し、それを慎重にただ受け入れてもらおうとすることには大きな違いがある。

彼は最終的に、本当は恋人に話したかった死体処理の体験を別の男に語り、その体験を尊敬すると言われるのに対して、尊敬してほしくない、と言う。それではいったい “What do you want?” (71) なのかと訊かれて “I want you to be disgusted” と答え、また “you didn't know that kid. So don't pretend like you care. Everybody wants

to feel like they're some caring person”と語り手が述べる。そこではなにかを目的とした語り口ではない、無意味で、安定した関係の中に物語を位置づけることを拒む語り口というものが目指されている。さらに、ここで語られる体験の内容とは、死んでいった男の死体処理を行っている、彼が必死で握りしめていたものが意味ある遺品ではなくただの石だった、という無意味さにこそ重点があるものであり、実に語り手はその石を持ち歩いているということが明らかになる。ここにおいては、意味のない物の物質性こそが真実だとして描かれ、それに対しては何も言わないことが倫理的な行為だとされることになる。そしてここにおいて、語り手にとってはこの死体がある特権的な位置を占めていることが明らかなのだが、タイトルが“The Body”ではなく“Bodies”であることが問題となる。つまり、“bodies”とは、語り手と恋人の体の不器用な接触によるぎこちなく慎重なコミュニケーションをもまた暗示するものなのだ。無言のうちのぎこちない身体接触においてある安堵を感じたのち、語り手は“*There were times, after dealing with the remains, when I'd grab a piece of my flesh and pull it back so I could see it stretch, and I'd think, This is me, this is all I am. But that's not always so bad*” (67) と思い、自分の“flesh”と“remains”を重ね合わせる。語らないことによる真実の体験の温存でもなく、わかりやすい嘘の物語に体験を馴致させてしまうのでもなく、ただ石のように無意味な物質性として“body”を差し出すというこのパフォーマティブな語り、この短編のトーンを支配している。

ほとんどがイラク戦争に行っておらず、少なくとも語り手その人と同じ体験をしたのではない読者は、まずは安定した分かりやすい物語を求める善意の聞き手に対して彼ら語り手が向ける悪意を引き受けなくてはならない。そして、おおむねある種の理解の失敗という形で放り出されるようにして突然の結末がつけられる、それぞれ綺麗に意味づけることができない短編を読んでゆき、“not always so bad”といったわずかなニュアンスを保持したまま、そこに残る細部の物質性に身を慣らしてゆかねばならない。

4. 悪意の相対化と理解ではない責任の共有へ

上で見た、退役軍人が聞き手に向ける悪意という問題は、実際に作品内において戦争の話をもっと正面から語ろうとする人間が現れる短編において、いっそう前景化する。そしてそのとき同時に、「表象不可能な体験」といったものが抑圧してしまうことになると考えられていた政治の問題が回帰するように思われる。

“War Stories”においては、爆弾によって髪も耳も失い、顔のほとんどがケロイドで覆われた男 Jenks が、自分の体験を語ろうとすることが作品の中心をなし、そこに“Jenks used to be me” (213) と、ひどい怪我を負った Jenks と自分の差は単に運の問題に過ぎないと考える語り手が絡む。“War stories”を語ることに関する語り手の悪意は、またしても男女問題に関して現れる。Jenks のひどい火傷の顔さえあれば、“Don't have to say anything. They'll start imagining all sorts of stuff” (215) と、

まともに戦争の話などせずとも、聞き手の女性に憐れみを喚起し、ナンパを成功させることができる。いわばここでは、Jenks の傷を負った body がいやでも行使してしまうパフォーマティブな語りもまた、ひとつのわかりやすい lies として機能してしまい、またも男性性をその背後に温存し、女性を一方向的に物として扱うような振る舞いが回帰してしまっている。兵士の集団が男性性を誇示する振る舞いの中で女性を物のようにして扱うのとは性格が異なるが、しかし、“Bodies”におけるような物としての体をただ合わせるといった語りの行為もまた、相手の女性を物として扱う危険と背中合わせのものなのだ。そしてこのような憐れみを見せる女に対し、語り手は “I wanted to choke her” (216) といった悪意を見せる。

短編内で Jenks の話を聞こうとするのもまた2人の女性であるが、しかし2人の女性は共に、それぞれ語り手が以上のような悪意を向ける対象の女性ではない。戦争に行っていない Sarah は美人の女優であり、セラピー的な目的と反戦的な目的の合わさった演劇のために戦争の話を書きたがっている。このような演劇のプロジェクトに語り手と Jenks は白い目を向けるが、しかし、語り手が “she’s way too smart to ever give a guy like me a chance” (221) と感じるように、その聞く態度にはわかりやすい物語の中に退役軍人を収めて憐れむ様子など一切ない。“We’ve got some PTSD vets,” Sarah says, making it sound like she’s keeping them in jars somewhere” (222) と、彼女にとって退役軍人はその表象不可能な体験によって憐れみと共に祭り上げられる存在などではなく、資料である。“Most people, when they try to draw Jenks out, talk to him in a ‘here, kitty-kitty’ voice, but Sarah’s all business” (223) と、Sarah は他の女たちとは違い、語り手にとっては別の形において扱いづらい存在として厭わしいものとなり、悪意の対象となる。

“I don’t trust my memories. I trust the vehicle, burnt and twisted and torn. Like Jenks. No stories. Things. Bodies. People lie. Memories lie” (226) という語り手の感覚は、人間の意識ではなく物が語るのだ、といった、“Bodies” で描かれた感覚と近いものだ。しかし、“a lot of the memories are gone. Nothing” (224) と、爆発のダメージと薬物治療によって（正確な）記憶をほとんど失っている Jenks に対して、自分の戦争の話をしてはならないと語り手が言う理由は、その感覚によるものではない。“I’d told him that if he gave this girl his story, it wouldn’t be his anymore. Like, if you take a photograph of someone, you’re stealing their soul, except this would be deeper than a picture. Your story is you” (225) と、問題は体験の独占権に関わるものなのだ。Jenks の語り口は、過剰な美辞麗句に満ちているある種感動的なスピーチのようなものであり、語り手もその文言自体に関しては “This is Jenks’s standard line. It’s utter bullshit” (228) と述べる。それにも関わらず、Jenks の語りを聞いて、感情的になるでもなく、資料としてより使える具体的な治療の悲惨さを淡々と訊いていくビジネスライクな Sarah から逃げるようにして語り手が席を立つのは、彼女によって Jenks の体験——本人が記憶していない以上、そ

れは文字通りに彼が自分の体験として語るこのできないものなのだが——が脱神秘化されてしまうからだ。戦争体験を語らずに保持しておくことで、背後に表象を超えた超越的なものを想定させ、それによって女性を性的に誘惑する、といったような男性性に関わる問題においてこれを捉えなおした際、Sarah が美女と設定されている理由もわかりやすいだろう。ここにおいては、タフで語りたがらない兵士の男性性が挫かれている。

もう片方の Jessie は、自身は何も語らないものの、工兵の語り手や Jenks とは違い銃撃戦に参加して怪我を負い、指が4本になっている女性として設定されている。“Her war dick is this big—’ I throw my hands out in the lying fisherman pose. ‘Ours is tiny” (221) と、そもそも語り手を男性性で圧倒している Jessie は、Sarah から逃げるように席を立ち、苛立ちをあらわにする語り手に対し、あくまでもよりよい聞き手に対してではあるが、Jenks が自分の体験を語ることがよいことだと思ったのだ、と述べる。そして彼女が想定している語り口とは、無意味に死んだ男にクローズアップもせず終わる、という、無意味で共感を拒む、握られていた石の語りと同様のものである。ここにおいては、むしろ作品内に実際には登場はしないが、有益な語りの効能といったものが見取られており、聞き手への悪意に対して相対化がなされている。そもそも、石や、捻じれた車といった物質性こそがよりよく語ることができる、という語り手も共有している論理に従えば、Jenks と Sarah がその身体に傷を持っているのに対し、傷を負っていない語り手は語ることができないのだ。ここで、語り手と Jenks の分身関係を考え、“He’s who I should have been” (236) という語り手の台詞を見るのであれば、語り手にとって Jenks は彼がしていない、するべきだった体験をしてしまったものとしてあることがわかる。ある種のサバイバーズ・ギルトのようなものも交じりつつ、語り手こそが Jenks の体験が語られることなく特権的なものとして留まることを望んでいるのだということも明らかのように思われる。したがって、ここで語り手は、なんらかの意味へと戦争体験を意味づけようとする聞き手への悪意を持つ、戦争を体験した兵士の態度と、逆に、理解できない体験を理解できないものとして温存しようとする聞き手としての決定的な体験の外にいる態度を併せ持つ人間として現れる。

Patrick Deer は “Mapping Contemporary American War Culture” において、アメリカが恒常的な戦争状態にありながらも、アメリカ国内で平和な日常を送る多くの人間にとって、それが身近なものだと考えにくくなっていることを問題とする。すべての兵士が志願兵によって構成されることによって自己責任の論理が生まれるといったような直接に政治的なレベルの問題だけではなく、国内における暴力・戦争表象、あるいは戦争にまつわる語彙の氾濫が、国外で現実に行っている戦争への想像力を麻痺させてしまうのだという。しかし、Scranton が Klay の小説を、政治を消し去ってしまうトラウマの特権視の文学史に位置付けたのに反し、Deer は、Klay の小説を、日常生活と戦争の間の橋渡しを試みるものとして位置付ける。以上の論で見てきたように、Klay の小説は戦地とアメリカ国内を地続きのものであるかのように提示し、そして個々の非-

体験が本人にとってさえも理解できないものとして位置づける。そのとき、戦地を経験したものであれそうでないものであれ、結局は誰にも特権的な権利などなく、“War Stories”の語り手のように、グラデーションによってのみその態度の倫理性を測られるようになる。そして“War Stories”ではすでに、ある程度まっとうで自然な反応と言える悪意に相対化が行われ、Sarahのように有効な資料を見つけて国内の一般人へのパフォーマンスとして働きかけるという政治の次元への準備が行われている。

“War Stories”が、戦争後の政治の次元を開くものであるとすれば、“Psychological Operations”は戦争へと繋がる政治の次元を作品内に取り込んでいる作品である。そして、このとき、責任の共有という問題が回帰することになる。

語り手は、退役した兵士として大学へ通い、“I tended to play the world-weary vet who’d seen something of life”; “It’s amazing how well the veteran mystique plays” (170) と、すでに見てきた、戦争体験を神秘化する振る舞いと戯れる。しかしその一方で、クラスで語り手のほかでは唯一の非白人である Zara だけが、“Zara was the only one who saw through me” (171) と神秘化のポーズに惑わされず、対等に政治的な議論を仕掛けてくれ、それを内心ありがたがっていた。そして彼は、Zara にだけは本当のことを話したいと幾度も思う。この語り手は、真剣に聞き手に話そうとする、短編集の中で唯一の語り手なのだ。

だからこそ、彼の従事した業務が、放送を利用することでムスリムを挑発して誘い出し、味方の兵士に撃たせる活動を含んだ、“Psychological Operation”という、語り手を軍事的に利用して相手をコントロールするものであったということが極めて皮肉な形で働き、この短編を複雑なものにしている。語ることと聞き手の女性を誘惑することが重なるという論理は、この短編においては大きく姿を変えて現れる。行きがかり上、ムスリムに改宗した Zara の前で、語り手は自らの体験を神秘化するようにして、それがまた一つの“Psychological Operation”だと意識しながらも語ってしまう。それに Zara が失望するかと思いきや、他の人々と同様に共感のような態度を見せるので、語り手は失望し、報復として相手を怒らせる語りを行おうとする。対等な立場で議論をしてくれる Zara にだけは本当のことを話したいという欲望と、この悪意に基づく語りへの欲望の間で語り手の語りは痛切に揺れ続ける。つまりこの短編においては、女性への誘惑は、不誠実な語りの行為によって怒りの感情を誘いだすということとして表れているのだ。ここで、相手を誘惑したり、相手に悪意を向けて怒らせたりといったことを目指す語り口を選択することも、語り手にとってまたひとつの“Psychological Operation”として現れてしまう。ムスリム兵士への挑発は、自分たちにとって自然にあらわれる罵倒の文句ではなく、相手の文化や感情を理解しようとしたうえで、その文化的な論理に沿った文句で相手を怒らせるものであった。つまり、この語りの行為はまず何かを表象しようとするということとは関わりがなく、相手を動かす武器としてある。そして、聞き手の感情を理解するということは、その感情を共有することではなく、それを利用して相手を殺すことである。このような体験を通じて、あらゆる語りがパフォーマティブな効果を持ち

うるということに意識的になってしまった語り手は、Zaraに正直に話そうとしながらも、“if I was PsyOpsing her”と考えるのをやめることができない。“PsyOps works best when you mean it”（181）と、正直に話そうとすることさえ、軍事的な作戦行動の中にあるものとして意識されざるを得ないのだ。こうして“Redeployment”のようにまたもや戦地とアメリカは地続きのものとなり、語り手はアメリカでの平和な日常においても戦争の論理を引きずって生き、語ろうとしている。

一方で、語り手が正直に語ろうとする行為自体も、“Not to share something, but to unload it”（203）と、行為としての結果が意識されるものとなっており、そしてそこで目指されているものとは、彼が戦争において抱え込んでしまった責任の共有である。語り手がまず自分の体験として語ろうとするものは、実際に相手を撃った兵士の代わりに、相手の兵士が死んでゆき熱が消えるのを熱スコープで確認する作業を引き受けたという話である。そこには“a mix of voyeurism and kindness”（187）があったと語られる。そしてこの行為によって、語り手はその死体が彼のものになったと女性に言われることになり、実際、“Why are you telling me this?”と訊ねられて“You asked me how I could kill my people”（189）と答えている。ここでは、見ること、物語を引き受けることと、そこでおこなわれた殺人の責任を引き受けることが繋ぎ合わされている。ここで——様々な種類の聞き手の態度が描かれる際と同様に——読者は自らが各物語に対して取らざるを得ない受容の態度を思わずにはいられないだろうし、また Klay が各語り手の物語を引き受けようという態度も確認される。

ここで見逃せないのは、“PsyOps”によって敵の兵士を誘い出した挿話にせよ、スコープの挿話にせよ、語り手が直接引き金を引いて相手を射殺したわけではないが、同様に責任が感じられているということだ。“Propaganda is sophisticated”（199）と、かつての戦争を支配したような大きな物語はもはや馬鹿げたものにはしか見えないが、“As a PsyOps specialist, as anything in the Army, you’re part of a weapons system. Language is a technology”といった形で、より細分化され、緻密な働きと柔軟な連携によって、ある種の語り手は分業的な“weapon system”の一部として機能し、責任の一部を受け持つことになる。語り手が“PsyOps”を行ったわけですらなく、スコープを除いただけの挿話に関しても、この責任の分担が拡張されたように、そしてまた“Money as a Weapons System”においてウェブ上を飛び交うEメールと金の流れによって戦争が戦地と国内をまたいでいたように、この責任の分担は、この短編においてより具体的な政治の問題と結びついて描かれる。語り手とZaraの会話の中では、戦争を支持した多くの議員が問題になり、そこでブッシュのプロパガンダが、あるいはより精緻化して一人の政治家のものなどではなくなったプロパガンダが果たした役割が嘆かれる。またそもそも彼が軍隊に志願した理由として“You Can’t Afford College Without Us”（192）といった経済的な理由も含んだ様々なスローガンが挙げられる。そのとき、戦争がそもそも起こった原因として、平和な国内において人々が語り、聞き、認めた様々な物語が問題となっているのだ。かつてのように、選挙によって選ばれたア

アメリカの代表としての大統領と、個々の国民が、代理表象の論理によって単一の大きな物語の中で責任を等しく分かち持つような感覚を持つのは難しいだろう。しかし、表象の原理による語りではなく、より細分化された、小さく、パフォーマンス的な語りの行為の積み重ねが歯車となって戦争を動かしているのだ。このようにして、戦場とアメリカ国内が地続きであるとき、兵士たちは自らが抱え込んでしまった殺人の責任を、語りの行為を通じて、いくぶんの悪意と共に、安全な場所にいるが、別種の語りに乗っかることで戦争を支持した人々と共有したいと願う。そして、Klay はイラク戦争における語りの行為と、そしてそれがどのようにある新たな巨大なシステムの中で作動しているかをつぶさに描くことによって、国内の人間にも責任が感じられるような物語を作り出そうとしている。

“Prayer in the Furnace” においても、すでに他の短編で現れたモチーフは共通して現れる。軍隊組織は腐敗しており、そのせいである兵士が死んでしまったことの責任を自らのものとして背負ってしまった別の兵士がおり、その話を従軍の聖職者として比較的安全なところから聞いている人間として語り手がいる。語り手は、腐敗した組織による事件の整理と黙殺にも苛立ちを感じるが、同様に、自分が牧師として兵士に向き合ったとき、いかに努力しようともその個別の体験を共有することはできないと感じることになる。一方で、この短編においては、責任を一人で抱え込んでしまった兵士の自殺という問題が出てくるために、牧師はやはり、兵士の体験の特異性と向き合ってしまう、それをカトリックの教義的にむかしから繰り返されてきた苦しみだとして堂々と言えなくなり、そして兵士に対してなんの説得力も行使することができなくとも、みんなそれぞれ自分自身の共有できない体験を苦しんでいるのであり、その連帯を感じる事が大事なのだ、と述べる。そして、“It didn’t matter to me if he didn’t think he believed anymore. Belief can come through process” (167) といった語り口は、“Money as a Weapons System” におけるイラク人通訳の、不条理に対してしかし向き合わねばならない、といった態度と通じる。ここにおいて、語り手は兵士の苦しみを聞き手として完全には共有できない、という体験を個人として苦しむ人間として現れている。イラク戦争においては、各自の苦しみが、各自の責任が、各自のこなす役割においてそれぞれ分業的に受け持たれる。そのとき、誰もが他の誰かの苦しみを不完全にしか共有できないという形で、極めて微妙な複雑さにおいて受け持たれることになり、Klay はこの微妙さへの感受性を拡張しようと試みているように思われる。

最後の短編、“Ten Kliks South” は、“This Morning our gun dropped about 270 pounds of ICM on a smuggler’s checkpoint ten kliks south of us” (271) という一文で始まる。ここにおいては、国内の多数の人間から見て戦地が（空間的にも、共感や想像を通じた責任の分担の対象としても）遠いところにあるというところか、戦場において軍事行為を行う兵士にとっても、相手を殺す行為が遠くで行われるように感じられるという問題が現れる。軍事革命後の情報機器の進歩によるハイテク戦争は、概して兵士と対象の距離を遠ざけ、そこから身体性を奪うものとなる。そして、“our gun” と

書かれるように、分業において行われる軍事行動においては、大砲の発射に直接関わった人間で殺傷者を分担して割り算すると、“you’ve killed zero point seven something people today” (272) といったことになるような不条理な感覚が生まれる。“I don’t feel like I killed anybody. I think I’d know if I killed somebody” (273) と、兵士は自分たちが人間を殺したはずなのに平和に食事をしているという不思議な感覚に苦しむ。ここでは、すでに見てきたような、様々なマニュアルや分業体制によってある体験が自分のものとしては感じられない、といった問題が、責任の問題と結びついているのだ。

この兵士は、責任をより分担することを求め、弾薬を送ってきた部門などにも“Shouldn’t they be responsible” (274) と責任があるのではないかと問う。上官が、“Or the taxpayers who paid for it? You know why not? Because that’s retarded” と答えるように、このような論理は留まるところを知らず拡大してしまう馬鹿げたもののように思われるのだが、この馬鹿げた論理にこそ向き合わねばならない。戦地から遠く離れて安全な場所においても、われわれ読者は、それぞれ断片的にしか語られることのない経験不可能な戦争の責任を、分業して受け持っているのだ。戦闘の痕跡の拭い去られた平穏な光景を眺め、語り手が “It’s too pristine. And maybe this is the wrong way to think about it” (280) と語るように、平和な国内において戦争について考えても、間違ったやり方によって思考しているのではないかといった不思議な感覚しか得ることはできないだろう。しかし、その違和感に向き合うことで、責任の分担を行うことが求められている。完全な理解といったものではない形で、ただ戦争において現れる様々な具体的なものを共有しようとし、できないことに苦しむことでこそ、限定的に責任を引き受けることができるのだ。

“Bodies” においては、戦争の話を語ろうとするものも、語られるものも、語りえないものに対して正しく沈黙するほかなかった。そして、誰かを殺したら殺したとわかるのではないかと訊いた兵士に対し、上官は “you wouldn’t know. Not until you’d seen the bodies” (273) と答えていた。しかし、短編集全体の末尾でもある “Ten Klicks South” の末尾においては、イラクからの死体がただあたりに敬虔な沈黙をひたすらに呼び起こしながらアメリカへと送られてゆき、そこでようやく “the silence, the stillness, would end” (288) と語られる。この挿話が伝えてくるのは、誰もが自分の体験として経験しつくすことができない、死体のような、手に握られた石のような無意味な物語を、それでもやはり一人称の物語として読み、自分のものとして引き受けようとしながら、それに困難を感じ続ける微妙なプロセスを通してこそ、イラク戦争の物語が語られうるのだということではないか。

5. 結論

この短編集 *Redeployment* においては、含まれるそれぞれの短編が、戦地において

さまざまな業務に携わった複数の立場の語り手による一人称によって語られる。これは、現代のグローバル戦争を代表するものとしてのイラク戦争が、もはや一面的な物語によってその全貌を語ることはできないということに、まずは対応するものであろう。複雑化し、多様化した戦争は、もはやすべてを見通すような超越的な視点によっても、あるいは一人の兵士にすべての兵士を代理表象させるような語り口によっても、語りつくすことはできない。そして同時に、この複数の一人称の語り手たちの存在によって、少なくともすべての物語が、作家本人の真実の体験によって構成されているのではなく、間違いなく虚構を含むものだということが、複数の短編を通して読む読者にとって明らかなものとなる。これは短編集としての作品に内在する性格であり、退役軍人が自らの真実の体験を屈折した語りによってなんとか語ろうとするというアメリカの戦争文学の伝統から身を引き離すものである。しかし、Klayが、過酷でトラウマ的な戦争体験の表象不可能性に鈍感なわけでは決してない。彼にとってはむしろ、戦争体験の表象不可能性は、作品の美学的なレベル、いわばメタなレベルで処理されるべき問題ではなく、それぞれの作品内部において、具体的に周囲の人間との関わりの中で問題化されるべき主題となっているのだ。

現代の戦争のきわめて細分化された柔軟な分業体制によって、またその体験の課す心理的負担によって、戦争体験は個々の兵士自身にとっても、はっきりと自分自身の体験として把握できるようなものではなくなる。したがって、重要なことはもはや、ある体験を正しく表象することや、戦争体験の特権化にも繋がりうる、その表象不可能性にはばかり拘泥することではない。むしろ、はっきりと自分が体験したとは言い難いような、部分的な戦争体験を、行為としての語りを通して、他者と分かち合うことによる、責任の共有が問題となってくるのだ。Klayは、わかりやすい戦争物語へと墮すことも、あるいは真実の戦争体験は理解不可能なものなのだ、という、もう一方のわかりやすい態度に墮すこともなく、この語りの行為に注目し続け、そして作家としても同様にパフォーマンス的な語りを行うことで、戦争の責任の問題を、そして兵士の苦境を、読者と共有することに成功している。過去にアメリカが行ってきた戦争と性格を異にするイラク戦争と向き合うことで、Klayはアメリカ戦争文学の伝統をもまた更新したと言える。

注

¹ Connie Ogleによる、“Interview: Marine veteran Phil Klay, author of ‘Redeployment’”の、冒頭でまず触れられるのがこの問題である。

² こうして出版年を並べるだけでも、この2人の作家と比べ、Klayが戦争を終えてから創作に取り掛かる早さもまた目立つように思われる。Jeffrey Brownによるインタビューで、Klayはアメリカに帰ってきて2か月後から書き始めたと答えている。Brownがその早さに驚き、過去の作家たちはもっと長い時間をかけた、と口にする、とKlayは書くのに時間がかかった、と述べている。

³ これが単なる行政の杜撰さを描くエピソードなのか、イスラエルが占領直後からガザ地区において行ってきたような、「反開発 (dedevelopment)」と呼ばれる、自律した産業やインフラの成立を妨げる政策を描くエピソードなのかは読者にも明確にはわからない。いずれにせよ現地の間人はその条件の下で何もわからないまま混乱に立ち向かわざるを得ない。

⁴ Klay 自身に関しては、たとえば Kate Kellaway によるインタビューにおいて、公的なものに奉仕するのをよしとする軍人の多い家庭環境と、また彼は運動が好きタイプであったことを入隊の理由に挙げ、戦争が行われていなければしかし入隊を迷っていたかもしれないと言う。いずれにせよ、Mother Jones によるインタビューにおいては、軍隊に入る人間が政治的に行われていること全てに賛同していると考える傾向を、イラク戦争に反対しながら入隊した友人を例に挙げて Klay は批判する。

引用文献

- Deer, Patrick. "Mapping Contemporary American War Culture." *Collage Literature*, vol. 43, no.1, Winter 2016, pp. 48-90.
- Hardt, Michael, and Antonio Negri. *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*. Penguin, 2004.
- Kakutani, Michiko. "The Madness of War Told in the First Person." *The New York Times*, 26 Feb. 2014, www.nytimes.com/2014/02/27/books/redeployment-iraq-war-stories-by-phil-klay.html?_r=0/.
- Klay, Phil. "After War, a Failure of the Imagination." *The New York Times*. 6 Feb. 2014, www.nytimes.com/2014/02/09/opinion/sunday/after-war-a-failure-of-the-imagination.html?_r=1/.
- . "A Soldier's Stories: Iraq Tour Yields Fictional Homecomings." Interview by Mother Jones. *Mother Jones*, 3 Mar. 2014, www.motherjones.com/media/2014/02/phil-klay-redeployment-iraq-short-stories/.
- . "Interview: Marine Veteran Phil Klay, Author of 'Redeployment'." Interview by Connie Ogle. *Miami Herald*, 26 Feb. 2015, www.miamiherald.com/entertainment/books/article11270189.html/.
- . "Phil Klay: 'I Had a Desire to Serve My Country and I'm a Physical Guy.'" Interview by Kate Kellaway. *The Guardian*, 16, Mar. 2014, www.theguardian.com/books/2014/mar/16/phil-klay-desire-serve-my-country-us-marine/.
- . *Redeployment*. Penguin, 2014.
- . "Treat Veterans with Respect, Not Pity." *The Wall Street Journal*, 23 May. 2014, www.wsj.com/articles/SB10001424052702303980004579576423045207210/.
- . "Writer Phil Klay Returns to War and the Strangeness of Coming Home for 'Redeployment.'" Interview by Jeffrey Brown. *PBS Newshour*. 24 Nov. 2014, www.pbs.org/newshour/bb/writer-phil-klay-returns-war-strangeness-coming-home-redeployment/.
- Scranton, Roy. "The Trauma Hero: From Wilfred Owen to Redeployment and American Sniper." *Los Angeles Review of Books*, 25 Jan. 2015, lareviewofbooks.org/

[article/trauma-hero-wilfred-owen-redeployment-american-sniper/](#).

上岡伸雄『テロと文学——9・11後のアメリカと世界』集英社新書、2016年。

諏訪部浩一「フィル・クレイ著『一時帰還』、『読書人』2015年10月9日、5面。

藤井光『ターミナルから荒地へ——「アメリカ」なき時代のアメリカ文学』中央公論新社、2016年。